
美しき音色

竜丸

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

美しき音色

【Nコード】

N0129C

【作者名】

竜丸

【あらすじ】

彼は病院の一室で生活をしていた。そんな時、聞こえてきたのは、前に聴いた事があるような気を起こさせる、とても美しい音色だった。

「退屈だ」

病院のベットの上で胡坐を掻き、口にはマスクをしながらそう呟いた彼は、偶然にも村を襲った悲劇を唯一生き残った人間。

「しっかし、この部屋の窓は小さいな」

彼の今の楽しみは、開ける事を禁止されている窓に顔を押し付け空や地上、秋が訪れ色付き始めている病院の周りの木々を眺める事ぐらいなもの。彼はその唯一と言ってもいい楽しみを、ベットから下りてする事にした。窓にへばり付いて地上を見ると、そこには楽しげに遊ぶ子供達や、それを見つめる人々の姿。

「何でこの病院の周りは、こんなにも平和なんだろう？ 俺の村では……。まあ、いつか。もう済んだ事だ」

その地上から空に視線を移すと、鳥が群れを成して何処かに向かつて飛んで行く姿があった。

「鳥か……。いいな鳥は。大空を飛んで、自由に行きたい場所に行く。ってまあ、そんな単純じゃないだろうけど、鳥達も……。そうだ、そうだよな、鳥だって大変なんだろうな、って何言ってるんだ俺」

そんな事を呟きながら、鳥が飛んでいく姿を眺めていると、彼の視界に鳥とは違う大きな影が目に入った。

「あれって確か、飛行船だよな？ 何でこんな田舎に？ って、そうか。ここは俺の村じゃないんだっただよな。はあ、また思い出したよ。もういいや、寝よう」

そう呟くと、ベットの上に飛び乗って、布団を被って真昼間から眠りについた。

彼女の願いを叶えただけ。そう『永遠に歌い続けたい』という彼女の願いを

「ふあああ、よく寝た……。あれ、今何時？」

すっかり暗くなった彼の1人だけの部屋には、時間を確認する物が無かったので詳しいな時間は分からなかったが、何となくだが想像は出来た。

「あのばあさん看護婦め！ こんな事しなくてもいいだろ？ 新車の嫌がらせか？ 飯を1日くらい食わなくても平気な事くらい分かるだろ」

この部屋にある物は、ベットとそのベットの横にある小さな台だけ。そして彼は、ベットの上で上半身を起こし、横の小さな台の上に、昼食と夕食が食器から出されて置いてあったのを見つけた。固形の物はそのままの形で、皿から出されて台の上に置かれていたが、汁物は流石に無理だったようで、1つの袋に混ぜて台に吊るされていた。それらの横に震える字で書いてあるメモがあったので、手にとって何て書いているか確認をした。

『もし明日まで、この元は幸せに生きていた生き物達を人が無理やり殺して作り出した、最後は人の排泄物となって終えていくだろう食べ物達を、お前さんが残飯に何てしてた時には……。』

「怖！ え、何この終わり方に、この食べたくなくなるような書き方は。もし明日まで俺が寝てたら、どうなってたんだ？ 何されてたんだ俺！ つと、そんな事よりも、この冷え切った奴らをどうやって片付けるかだな。残飯には出来ないんだから」

そんな事を言いつつも、マスクを外して昼・夕合わさったご飯を、彼は残さず綺麗に食べ終えた。食べ終わると、すぐにまたマスクを

するのは決まりになっている。それは、彼が感染症を持っているかいないか、未だに調べがついていないものの、今はそれ以上の最善策が見つからないため。

「分かってたさ。ああ、分かってたよ。こんな時間に起きたんだ。寝転んだって、すぐに寝れるわけないよな」

2食分を一度に食べて満腹になった彼は、ベットの所で足元に置んだ掛け布団に足を乗せて寝転び直した。枕の上に腕を組んで頭を乗せ、部屋に入った日から1度も変わっていない天井の模様を見てそう呟く彼の耳に、何処からともなく聞こえてきた音。それは、彼が生きてきた中でもっとも綺麗で、もっとも美しい音色。その音色を、彼は心のどこかで聞いたことがあると思っていた。

「何だ？ 何かの音楽か？ けど、こんな時間に音楽なんて聴いてたら、怒られるだろ？ って、音がこの部屋まで漏れるくらいの音量で聴いているのか？ もしそうだとしたら、どれだけデカイ音で聴いてるんだよ。けどまあ、いつか。耳障りな音楽じゃない。何だか落ち着くような、どこかで聞いたことがある…よう…な」

「で、そんな格好で寝てたわけかい？」

「そ、そうです」

昨日彼は、寝転んだ状態のまま寝てしまったため、冷えてお腹を壊していた。

「まあ、自業自得だわね」

おばあさんの看護婦が、彼の溜まった洗濯物を籠に入れながら、あまり関心がなさそうにそう言った。彼は布団に包まりながら、その無関心ぶりに少し腹が立った。

「自業自得って、ばあさんが飯をあんな風に置いとくあーあー！」

が、最後まで言えぬまま、彼は布団を剥ぎ捨てて走ってトイレに向かった。そして、この日は腹痛で、トイレとベットの繰り返しだけで1日が過ぎていった。それでも、何も無い日常よりは、彼にと

つては良かったのかも。ただ、少し落ち着けたのが夜中だった事は、辛い以外何物でもなかっただろうが。

“う、うん。く、そ、まだ腹痛いな”

ベットに寝転び、布団に包まって唸っていた彼だったが、なかなかお腹の痛みが退くことはない。どれくらいそうやって唸っていたか、彼は分からなかった。冷や汗も出て、本当に辛くてとてもじゃないが寝れそうもなかった、そんな彼の耳に、突然聞こえてきたのは昨日と同じ、あの美しい音色。

“あれ、これって昨日と同じ音だよな？ また夜中に音楽聴いてるのか？ 怒られない…のか……”

すると不思議な事に、あれだけ苦しんでいた彼がいきなり眠りに落ちたのだ。しかも、とても穏やかな眠り落ちているようだ。冷や汗も引き、唸る声もなくなった彼の寝る様子で、腹痛が収まった事も分かる。

「おかしい。絶対におかしい。何で誰も聴いてないんだ？ 何で俺だけが聴いているんだ？ 何で？ どうしてだ？」

ベットの上で胡坐を掻いて考え込んでいる彼だったが、まったく見当がつく様子はなく、先程の言葉を繰り返し繰り返して聞いていた彼の言うおかしいとは一体何のことかというところ、あの2日続けて聞こえてきていた、美しい音色を聴いた者が、彼以外誰一人としていないという事。それは、彼を1日1度診察に来る、定年をとつて過ぎた医者と、同じくらい歳を取った、彼が「ばあさん看護婦」と呼ぶ看護婦、この2人に確かめた事で分かったのだ。まあ、この2人だけでは、ただ聞こえなかったという事もあると思えば、おばあさんの看護婦に彼が、

「ばあさん、看護婦さんの中に、誰か聞いた人がいないか確かめてくれないかな」

と、昼食を持って来たときに頼んで、夕食の時にどうだったか聞

いたので間違いない。彼以外誰も聞いていなかった。その事がまずまず彼を悩まして、考え込ませて、考えれば考えるほど不思議と思ってしまう。そんな悩んだ彼が、何かの結論に辿り着いた様に寝転んだ。

「よし、何処から流れてるのか、確かめよう」

彼は、単純でいて明快な人間。分からなければ、目で見て、触れて、確かめるという性格。そのために、夜中に備えて夕食を掻き込むと、日が暮れていない夕方から眠りについた。

案の定、その日の夜も音色は聴こえてきた。夜中に目を覚ました彼は、ベットから抜け出し、部屋も抜け出した。何故そこまで彼が不思議がるのかというと、前に聴いた事があるような気がする、というのもあるがそれよりも、彼のいるフロアは彼以外誰もいないという事が1番のようだ。つまり、同じフロアから聴こえてきていないというのは確定しているにも係わらず、彼以外その音色を聴いていないのだ。これが彼には不思議でならなかったので、確かめずにはいられなかったのだ。

そして彼は、忍び足で裸足のまま病院を出た。ここでも不思議な事が起こった。誰とも廊下で会わなかったのだ。当然夜だからだということもあるが、ナースステーションの前を2度通ったが、その2度とも看護婦が誰もいなかったのだ。そう誰も。それを不思議に思いながら、彼は逸る気持ちを抑えて、早足になりながら音色の方に近づいていく。

その音色の音源は、町から数分歩いた場所にある、小高い丘の上から聴こえてきていた。その丘に行く途中も、彼は誰1人として町では出会うことがなかった。まあ、夜中なので、当然と言えば当然だが……。

彼は早足で、1度も立ち止まる事なく、少し息を切らせながら丘の近くにまで着いた。そしてその時、丘の上を確認するように見た

ら、その音色の音源に2つの人影が見えた。そう、この時初めて音色を奏でている音源が、人なのだと気づいた。しかも、楽器を使うのではなく、音色は人が出しているという事も。それに驚いて駆け寄ろうとした彼だったが、何故だか体を屈めて、歩調は病院を抜け出す時よりも忍び足になり、息を押し殺して少しずつ近づいていく事を選んでいた。

暫く忍び足を続けて近づいていくと、その2つの影が女の子である事が分かった。1人は背が高く、髪も長い。その髪が、秋の夜風に吹かれて煌めいている。多分、年齢は20代だろうが、如何せん顔が確認できる距離ではなかったので詳しくは分からなかった。が、その女性が歌を歌ってるのは分かった。服装は秋の夜には肌寒い、白いワンピースを着ている。そしてもう1人は、見た目だけで想像すると10歳前後の、とても小さな女の子。その女の子は歌っている女性の事を、少し離れた石に腰を掛けて見ている。服装は女性とは対照的な、黒の大きなマントを羽織っているの、肌はどこも見えず、頭にはフードを被っていたので、髪の長さや顔は歌っている女性以上に分からない。それでも女の子だと分かった彼は、その女の子のマントを見て、“その体にしては大きすぎる”と思ったようだ。

そんな事を考えているのが油断を招いたのか、屈んで近づいていた足を滑らし、思わず声を出してしまった。扱けはしなかったものの、前に手を付いてから彼は後悔した。先程の声に反応した声が聞こえてきたからだ。それは、歌を歌っていない女の子。しかも、彼は2人の方を見ずにそれが分かった。何故分かった、それは、歌が途切れなかったからだ。歌を無視した、警戒している女の子の音が響く。

「誰だ！」

彼は滑ったまま地面に伏せていたが、流石に不味いと思い、両手を頭の上に上げながら立ち上がって自己紹介をした。

「あ、あの！ 怪しい者じゃないよ。だから警戒しなくていい。俺

の名前は、クリフ。クリフ・ヴィンセント。この近くの、って、結構遠いけど」

「名前なんてどうでもいい。どうして、お前は動いていられる？」

「え？ どうしてって……」 “この女の子、どこかで見たことがある”

クリフの答えを石から下りて、全身が黒のマントで覆われた女の子は待っている。だが、クリフは考えるが、先程の言葉の意味が分からない。それに気づいたのか、女の子が違う質問をした。

「どうしてここが分かった？」

「ど、どうしてって、彼女が歌ってる歌が」

クリフの言葉に驚いた女の子が、被さるように話す。

「歌ってる？ お前には聴こえるのか？」

「聴こえるも何も」

「聴こえるのか？」

「あ、ああ」

それから女の子は無言になって、何か考えているようだった。その間も、女性は変わらず歌い続けている。その女性を見ていたクリフに、女の子が思わぬことを話した。

「メルメネは、言葉なんて喋れない」

「メルメネ？」

「お前が彼女と言ったのがメルメネだ」

「そ、そうなんだ。ついでに、君の名前は？」

「……。私の名前はヘル」

「ヘルって、あ」

「私の事はどうでもいい。それよりも、お前が間違っているから教えてやるんだ。メルメネは、歌なんて歌っていない。メルメネは音色を奏でているだけ」

「音色を」

「それに、目も見えていないし、耳も聞こえない、匂いも分からないし、味も分からない、メルメネにあるのは右手の感覚と音色を奏

でる事が出来る喉だけ。メルメネに、それ以外は何もない。だからお前が言った事は間違いだ。歌ではなく音色だ。間違えるな」

「ああ、分かったけど、どうしてそんなに何も無いんだ？ それじやあ、大変だろう。それに、何故そこまで君は詳しく」

「お前には、全て関係ない事だ。それに、もう意識が薄れてきているはずだ」

女の子のその言葉を聞いた途端、クリフの目の前が少し揺れ始めているのが分かった。

“そ、そう言われれば……”

「で、起きたらいつもの部屋だったってわけかい？」

「はい」

「まあ、夢でも見てたんだろうさね。あまりにも外に出て行ってないからさ、お前さんは」

そう言って、部屋からおばあさんの看護婦が、洗濯物を持って出て行った。クリフの部屋には、歳を取った人間しか来ない。その理由はクリフ自身が一番分かっていた。そう、クリフのいた村で起こったことが原因だ。が、そんな事はもう、クリフには関係なくなっていた。頭の中は、昨日の晩の事でいっぱいになっているから。

“あれが夢だった？ そんなわけない……。いや、もしかしたらそうかもしれない。たとえ夜だといつても、あの2人に会うまで、人の気配がまったく無かったんだ。それに、病院で誰にも会わないなんて夢としか……。けど、だったら、この手についた草はどう説明する？ 夢の中から持ってきたのか？ それこそおかしな話だ。それに、あの2人を俺は……”

ベットの上でいつものように胡坐を掻きながら考えていたが、クリフの性格上深く考えるのは苦手。

「分からん！」

そう大きな声を出して勢いよく寝転んだクリフが、分からない時
に取る行動は、考えるよりも自分で確かめる事。そして、いつでも
寝れるクリフが昼から眠りについた。

クリフは昨日の丘に来ていた。そこには、昨日と同じ光景があつ
た。メルメネは昨日と同じように歌い、ヘルは昨日と同じように少
し離れて石に座って見ている。が、昨日と違うのは、クリフの事に
ヘルがすぐに気づいた事。

「やはり来たのか」

その問いに昨日と同じくらいの距離を保ったまま、昨日と違い隠
れる事をしないでいたクリフが答えた。

「ああ、気になって。だっておかしいだろ？ 俺以外、彼女の歌を
き
」

「彼女ではなくメルメネ、歌ではなく音色だ。一度聞いたら忘れる
な。私は物覚えが悪い人間が嫌いだ」

“……昨日も思ったが、随分と勝気な子だな。俺の話を最後まで
聞いていないし。まあ、いいが” 「そうだった。メルメネ、メル
メネ。そのメルメネの音色を俺以外は聴いてない」

「聴いていなんじゃない」

「だったら、聞こえないのかしら」

「聞こえないわけでもない。ただ、頭の中に残らないだけだ」
「？」

昨日といい今日といい、クリフの頭では理解できない事をヘルは
言っていたが、次の言葉はそのどれよりもクリフを驚かせた。

「それよりも、どうしてお前は生き残っている？」

「！ どうして生き残」

「私が聞いているんだ。どうしてお前はあの村で生き残れた？」

「そんなの、俺が知るはずないだろ！ それよりも、君は」

「君ではない、ヘルだ」

「ヘルね。ヘルは、どうして知ってるんだ？ 確かに有名にはなっている様だが、それでも……。それに、村で何が起きたのか知っているような」

「ああ、知っている」

「何をし」

クリフの言葉を遮って、石から下りて近づくヘル。その時フードを脱ぎながら現れた顔は、紛れもない女の子の物。まあ、声も女の子だったから当然だが。そんな事よりも、クリフが考えていた事は。

“この顔、どこかで……”

深く考え込もうとするクリフを無視して、ヘルが言葉を掛けた。最後になるだろう言葉を。

「お前には全て関係ない事だ。それに、今度は生き残れない。お前はもうここで終わりだ。眠るんだ、永遠に」

「そんな…事……」 “また……か……”

ここでまた、クリフの意識がだんだんと薄れていく。崩れるように地面に膝と手を付き、体から力が煙のように抜けていく感じに襲われる。それなのに、クリフの頭の中にはメルメネの美しい音色だけが、鮮明に響き渡る。体がぐらつき膝と手で支える事ができなくなったクリフが、地面に崩れた時、地面に伏せるクリフの耳元にヘルが囁いた。

「お前はここで終わりだ。メルメネは一生終われない。私に願ったから」

それを聞いて、クリフの視界は無くなった。

朝日が射す町を、2人が手を繋いで歩いている。その町はまるで死んだように、生き物の姿がなく静まり返っている。その町を小さな女の子が、女性の手を引いて歩いていた。その手を引かれていた

女性が、何かに躓つまずいて転ぶ。その転んだ女性を、女の子が優しく起こしてまた手を繋いで歩き出した。転んだ女性の膝からは血が出ていたが、痛がる様子も無く女の子も気にしない。そして2人は、ただ次の町を目指し歩いていった。そう、次の町を目指して。

「あれ、何で俺……」

寝ぼけながら体を起こすが、寝ぼけていたのもう1度寝ようとした時。

「ってそうだ！ 確か2人がそこに、っていないな。はあ、完全に日が昇ってるな。どうするかな？ 今帰ったら、病院の人間大激怒してないか？ 窓すら開けちゃダメな俺が、外に出て一泊したんだからな。でもまあ、考えても仕方ない！ 帰るか」

完全に目を覚ましたクリフが、「寒いなあ」と言いながらすっかり冷え切った体を、温めるように腕を摩りながら起き上がる。

そして、暫く歩いてクリフが町に着いた。が、朝だというのに声がするどころか人の気配がまったくない。そう、こんな事を前にもクリフは体験していた。それで焦る気持ちを前面に出して、病院に向かつて早足になる。その病院に向かう途中の曲がり角を曲がった先に、店から見えたのは足だけが外に出ている姿。そしてこの時、クリフは確信した。その足に向かつて走り出し、足の出ている店の中を覗いて体を確認した。その足の持ち主は、口から赤い泡を噴出して既に息をしておらず、死んでいた。

“他の人は！”

クリフの頭の中に自分の村の惨劇が蘇り、走り出していた。

地面に力なく座り込み、涙を流しながら自分のした事を悔やみ、

絶望を感じた。

「クソッ！ やっぱ俺が外に出たからか？ だからこの町の人たちが死んだのか?!」

町中を走り回ったクリフが見たものは、村と同じ様に全ての人が死んでいた町の姿。ある者は体中に斑点が出来、ある者は穴という穴から血が溢れ出し、それぞれが様々な死に方をして。

「クソッ！ クソッッ！ 俺の村と同じじゃないか。やっぱ、俺が病気が何か持っているのか！ だったら、何故俺だけ死なない！ 何故俺だけ死なない！ だったら、何故……」

座り込んでいたクリフの頭の中に、最後に聞いたあの美しい音色が流れた。そして、この時クリフは今まで思い出せなかったことを思い出せた。

「そうだ、あの2人。メルメネとヘル。俺は2人を知っている。俺の村にも来ていた。俺の村でも歌っていた。同じ歌を、同じようにその歌を聴いた次の日に、村人が全員死んだんだ。俺以外は。もしかしたら、もしかするのかな？ 何か2人は知っているのか？ いや、メルメネは知らないかもしれないが、ヘルは間違いなく知っている。そうだ、2人を捜そう。そして聞こう、一体なんで歌っているのか、何で俺だけが死なないのか」

ここまでクリフの意思が固まれば、する事は1つしかない。

「よし、そうと決まれば、まずは資金を集めよう。あの2人を追いかけるんだ。って、もしかしたら、まだこの町に？ いや、いるはずない。分かる。分かるんだ！ 勘だけど……」

しかし、不安が過ぎつても行動を起こすのがクリフだ。悪いとは思いつつも、町にある家々に入ってお金を集めて回った。その資金集めが想像以上に時間を食って、日が沈んで夜になっていくことに気づいたクリフは、一応確認のために耳を澄ませる。耳を澄ませながらまだ集めるが、あの音色は聞こえてこない。それで確信が持てたクリフは、次の日の朝、2人を追って町を発った。

私は彼女の願いを叶えただけ。

ただ、年月が経ち過ぎて彼女は言葉を忘れてしまった。けれどその代わり、私は彼女に音色を奏でる事を与えた。それが彼女の願いだから。だから私は右手の感覚も残してあげた。彼女が新しい楽譜が読めるように。

そう、彼女の願いは歌を歌う事。今は歌の代わりに音色を奏でているが。そして、音楽は聴く者がいなければ音楽ではない。だから私は、私以外の新たな観客を求めて次の町に彼女と進む。そこで彼女は新たな観客を前に奏で続けるだろう、この美しき死の音色を

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0129c/>

美しき音色

2008年11月7日06時32分発行